

平成30年度劇場・音楽堂等機能強化推進事業
(地域の中核劇場・音楽堂等活性化事業)

成果報告書

団 体 名	公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団	
施 設 名	ロームシアター京都	
助成対象活動名	公演事業	
内定額(総額)	21,745	(千円)
公演事業	21,745	(千円)
人材養成事業	0	(千円)
普及啓発事業	0	(千円)

(2) 平成30年度実施事業一覧

【公演事業】					
番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	ミュンヘン・カンマーシュペーレ『NO THEATER』	7月6日(金)～8日(日)	作・演出：岡田利規、 音楽・演奏：内橋和久 他	目標値	1,260人
		サウスホール		実績値	895人
2	ロレーヌ国立バレエ団 トリプルビル	9月21日(金)、22日(土)	「SOUNDANCE」振付：マース・カンガム 「STEPTXT」振付：ウィリアム・フォーサイ 「DEVOTED」振付：セシリア・ベングレア & フランソワ・シェンヨー	目標値	1,100人
		サウスホール		実績値	546人
3	笠井勲振付 「高丘親王航海記」	1月11日(金)、12日(土)	原作：澁澤龍彦 演出・振付・台本：笠井勲 出演：笠井勲、黒田育世、近藤良平、 寺田みさこ 他	目標値	1,200人
		サウスホール		実績値	567人
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
平成30年度の目標値、実績値				目標値	3,560
				実績値	2,008

【妥当性】

自己評価

社会的役割（ミッション）や地域の特性等に基づき、事業が適切に組み立てられ、当初の予定通りに事業が進められていたか。

「文化芸術の創造・発信拠点として、京都における文化芸術のインフラのハブとしての役割を果たしていくとともに、京都に新しい『劇場文化』をつくる」というロームシアター京都の社会的役割（ミッション）に基づき、事業を実施した。このミッション実現のためには、地域の人々に、世界的水準において質の高い、ある一定規模の作品を鑑賞する機会を、定期的に提供することが重要である。今回の対象3事業は、まさにその根幹をなす公演である。現在の京都において、中劇場規模（サウスホール定員：716名）の作品、特に海外作品をプログラムできる劇場は限られていることもあり、西日本地域にとって貴重なものとなっている。

京都の伝承・創造・革新を繰り返す多様な文化背景を鑑みて、「能楽と現代演劇が交差する舞台」、「ヨーロッパのコンテンポラリーバレエ界を牽引するバレエ団公演」、「舞踏家による読売文学賞受賞作品の舞台化」の3演目を選定した。

「大学のまち」という地域の特性を活かし、ユース料金を設定し、若年層の来場促進に努めた。また、「国際交流都市・国内外からの観光客」が多いこともあり、ドイツ語上演であったミュンヘン・カンマーシュピーレ公演において、日本語字幕だけでなく、英語字幕も表示した。

当初の計画と大きくかけ離れた点は、入場者数である。3事業のうち、2事業は目標値をかなり下回った。要因としては、京都における演劇やダンスの「現代的な作品上演」の集客数についてデータ不足もあり、把握しきれていない課題がある。現状では、目標値の設定が高すぎた可能性がある。

ミュンヘン・カンマーシュピーレ公演は、のちに「平成30年7月豪雨」と名づけられた大雨と日程が重なり、開催が危ぶまれ、遠方からの来場は難しい交通状況だった。この公演は、天候の問題がなければ、目標に達していたことが予測され、残念な結果となった。

助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が継続して認められるか。

平成30年度に公募があったロームシアター京都の指定管理者選定における仕様書のなかには、他の運営方針と共に、「質の高い舞台芸術や新たな文化創造の場として世界文化都市・京都を発信する“文化の殿堂”」と記されている。具体的には、①自ら企画・制作した作品、②外部の文化芸術団体等と協同し制作した作品の上演、③芸術性の高い舞台芸術作品の招聘、④鑑賞者、制作者、舞台技術者等の育成を目指した事業を挙げている。本助成対象事業は、この①～④の要素を含むものであり、設置者である京都市からの要望及び期待に沿うものである。

オリジナリティのある文化施設が立地し、さまざまな実演家、アーティストが京都を拠点に活動している。そこに我々が加わることによって、これまで京都に機能として欠けていた総合舞台芸術に対応可能なメインホールをはじめ、中規模のサウスホール、リハーサルスタジオとしての使用も可能なノースホールの3ホールを有する劇場に対するニーズ、期待は大きい。特に、中規模以上の舞台作品上演、鑑賞機会への希求は高い。本公演は、3公演ともサウスホールでの上演で、この規模、質の作品上演を今後も継続して、定期的上演することが地域のニーズに応え、我々の社会的役割（ミッション）を達成するひとつの方法であると考えられる。

これまで京都になかった規模の劇場が稼働することにより、地域の舞台芸術関係者の雇用を生み出し、活性化を促している。

京都は、多様な文化芸術に関わるアーティスト・文化芸術団体等が行き交い、国内のみならず海外とも文化交流が盛んに行われている。京都の文化芸術を目当てに訪れる外国人観光客も増加している。（平成28年観光客数約5,500万人、うち外国人観光客約660万人）海外からの観客、アーティストを迎え入れ、国際交流の場を生み出している。

これらの事象、状況を鑑みて、文化的、社会的、経済的意義を継続して認めることができると考えている。

【有効性】

自己評価

目標を達成したか。

目標は以下の5項目を設定した。

- ①国際水準の質の高い公演を紹介し、観客に新たな発見や刺激を与え、舞台芸術への関心を喚起させる。
- ②アーティストが最適な環境でリハーサル・本番を迎えられるようにし、ベストな舞台鑑賞環境を観客に提供するように努める。
- ③公演だけでなく、トークや広報媒体等で、コンセプトや作品の背景が観客に伝わるようにし、より深い鑑賞を体感してもらう。
- ④ある一定の層だけでなく、幅広い興味から来場を促す広報活動を展開し、多くの観客に足を運んでもらう。
- ⑤ユース料金（25歳以下）を設定し、次世代の観客の掘起しを行う。

①③については、観客に対して鑑賞後のアンケートを実施し、満足度及び舞台芸術への関心を測る項目を入れ、集計した。結果、87%以上の満足度が得られた。

（ミュンヘン・カンマーシュピール82.6%、ロレーヌ国立バレエ団100%、笠井叡80%）

②アーティストには事業終了後、劇場の改善点について聞き取り調査を行ったが、具体的な課題は挙げられなかった。観客へのアンケートでは、座席による見え方のばらつき、字幕についての不満がいくつかあった。

④⑤アンケートに任意で観客の属性を記入してもらい、分析を行った。女性が70%、男性が30パーセント（無回答除く）。ユースチケットの購入者が少なく、30代以上が多かった。

①③に関しては、観客アンケートの結果を鑑みると、目標を達成することができ、事業が有効に働いたと言える。②については、アーティスト側の創作・発表環境を整えることはできたが、観客の鑑賞環境については課題が残った。特にテキストのある海外作品を本来の魅力を損なわずに、日本の観客に伝える方法について、字幕等さらなる工夫が必要である。④⑤については、【妥当性】の項目でも触れたが、そもそも入場者数に大きな課題がある。ユース層に限らず、観客の掘起しと広報手段の開発について、次年度以降、最重要項目として取り組む。

【効率性】

自己評価

アウトプットに対して、事業期間が適切で、当初の計画通りに進んだか。
アウトプットに対して、事業費が適切で、当初の計画通りに進んだか。

事業期間については、概ね当初予定通り進んだ。一番早い日程での実施となった、ミュンヘン・カンマーシュピール公演は、チケット発売が年度早々の4月、それに伴い、チラシ作成が平成29年度内となり、助成対象期間以前から動く必要があった。

公演数に関しては、最終的な入場者数から考えると、各公演1回ずつ少なくとも収容人数内に収まる数字だった。公演回数を少なくし、規模をコンパクトにすることで効率性を高める方法も考えられるが、多様化するライフスタイルに対応し、平日のソワレ、休日公演を行い、観客の来場可能性を拡げ、アクセスを容易にすることを優先して実施した。また、すでに顕在化している要望に対応した、集客が望める事業を行うのではなく、我々から新しい価値観を提案する事業企画を行うことで、新たな需要の掘起しや別ジャンルの関心層流入を目指した。現状では、効率性については高く評価することはできないが、数年後、十数年後の未来への投資と考えている。

予算に関しては、当初案からの入場料収入の減額、助成金や協賛金の減額もあり、支出をおさえる必要があった。舞台費や人件費は、事業途中でおさえることが難しい部分もあり、主に宣伝・広告費をおさえざるを得なかった。宣伝・広告費をおさえたことが、一概に集客が伸びなかったことへの要因にはできないが、影響があったと推測する。

やはり、収支決算から考えても、もっとも課題と考えられるのは、入場者数の少なさである。世界的知名度が高くとも、日本での公演機会が少ない、ミュンヘン・カンマーシュピールやロレーヌ国立バレエ団の公演や、調整を行い上演直前まで完成形を見ることができない新作公演といった、入場者数や入場料収入についてはリスクの大きい公演であったと言わざるを得ない。広報手段など改善していく余地は大いにあるが、効率性や経済性の指標で図りきれない部分を優先した結果だと考えている。

【創造性】

自己評価

地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮する優れた事業であった（と認められる）か。

公共劇場やフェスティバルでの従事経験のある専門の人材を開館準備から擁してきた。さらに、本助成対象事業をはじめ、基本的に上演団体と直接やり取りをし、上演を行い、実績を積み重ねてきた。他劇場・フェスティバルの芸術監督やスタッフ、アーティストと将来的な展開について意見を交わすことで劇場間交流が促進され、我々の技術・制作スタッフにとって、様々なノウハウを蓄積することができている。また、京都市交響楽団の第二フランチャイズ劇場としての機能を果たしているほか、新国立劇場との連携・協力に関する協定書の締結を控えるなど、各所との連携を強めている。

ロームシアター京都は、前身である京都会館の頃からモダニズム建築（設計：前川國男）として注目され、その再整備設計では、第27回BELCA賞ベストリフォーム部門を受賞している。メイン・サウス・ノースの3ホールを有し、各事業に適した会場、使いやすさ、ホール設備についても好評を得ている。

ドイツ有数の公共劇場、ミュンヘン・カンマーシュピールレのレパートリー作品を上演することで、我々も取組を始めた「レパートリーの創造」のためのシステムを学ぶことができた。劇場専属の俳優の動きと声、音楽はひとつのグルーブを形成し、岡田利規の作品世界をかつてない形で成立させ、芸術性において高い評価を得た。海外の劇場専属劇団が日本の演出家を迎え制作し、日本を題材にした作品の日本公演を実現できた意義は極めて大きい。

現代作品の上演を専門とするロレーヌ国立バレエ団のトリプルビル、3本立て公演は、それぞれの振付家の個性が発揮され、その表現の幅の広さに驚く観客の感想が集まった。

笠井勲公演においても、日本のダンス界を代表するダンサーが揃い、文学作品をベースにした野心的な試みを評価するレビューがダンス専門誌に掲載された。また、公共劇場が新作の作品創作の経費を負担し、共同製作に名を連ね、京都で初演を迎えたことも重要な有意性があった。



左上：
ミュンヘン・カンマーシュピールレ 『NŌ
THEATER』

撮影：井上嘉和

右上：
ロレーヌ国立バレエ団 トリプルビル
写真：菅原康太

提供：KAAT神奈川芸術劇場

下：
笠井勲振付「高丘親王航海記」
写真：守屋友樹

【創造性】

自己評価

地域の実演芸術の振興など、地域の文化芸術の発展につながっていた（と認められる）か。

平成30年秋に次期指定管理者の候補となる団体の選定が行われた。選定委員会においては、2016年の開館からの運営状況について、高い稼働率の維持・安定的な運営等の理由から、地域の実演芸術・文化芸術の振興拠点として高評価を得た。今後の運営に関する提案内容についても、文化芸術の振興に大いに資するものとして期待されており、今回の選定では、京都市では例のない8年という長い指定期間が設定された。

事業や施設に関する要望や提案を集めるために、①自主事業の入場者、②施設利用者（主催者）、③窓口来訪者を対象とする定期的なアンケート調査の実施や、レセプションистやチケットカウンターの職員が利用者の声や気付きを共有する仕組の拡充に努めている。これらの取り組みで得られた声からは、当館への高い満足度がうかがえる。

さらに、劇場自主事業の支援のためのサポーター・パートナー制度や劇場の会員制度を確立し、月1回発行の通信の送付、会員向けイベントの開催（劇場ツアーやリハーサル見学会、アーティスト・スタッフとの懇談会）等でコミュニケーションを図っている。多くの会員数を擁し、年間600万円超の寄付金を頂けていることは、事業への評価が地域からの支援という形でも表れているものと捉えている。

広報については、知名度の向上やチケット販売枚数の増加を目的とするだけでなく、当館が生み出す価値を直接的な受益者以外にも理解していただき、市民とのコミュニケーションを深めるものと考えている。例えば、年2回発行の機関誌『ASSEMBLY』では自主事業の紹介に留まらない、広い視点から舞台芸術の面白さ、深さを伝える内容を掲載し、文化芸術の発展に繋がるよう取り組んでいる。平成30年には、劇場のウェブサイトを全面的にリニューアルし、施設概要や公演情報の掲載はもちろん、より手軽なチケット購入を可能にし、他劇場の情報掲載も行うなど、利用者の利便性向上を図った。

【持続性】

自己評価

事業を通じて組織活動が持続的に発展した（と認められる）か。

ロームシアター京都を運営する、公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団は、「中期経営計画2021」（平成30年3月発行）を策定し、2018年度から2021年度までの4年間の方針、それぞれの主要成果指標を定めている。

京都市の文化芸術のインフラの経営を総合的かつ安定的に展開し、経営基盤を強化するため、組織運営に関して「自立的・安定的な組織運営力の向上」「働き方改革等への対応」「組織人員体制・配置等の最適化」「危機管理体制の確立・運用」の4つの重点取組事項を推進している。財務運営に関しては、「中期的な収支の見通しに基づく財務戦略の構築・運用」「財団全体・各部門の財務管理の強化」「戦略的・計画的な投資等の推進」「ファンドレイジングの推進」を重点取組としている。

P D C Aの流れは、理事会を中期経営計画及び年度事業計画の承認・評価の最高機関として、計画の進捗確認・年度評価及び事業計画の作成・進捗確認・年度総括、各事業の実績報告・事業評価は各部門の責任者で構成する月例会を行っている。2022年度以降も、現在のものを発展させた次期中期経営計画を策定予定である。

この計画の各部門の方針のもと、設置者である京都市からの指定管理料、各所からの助成金、協賛金、寄付会員からの支援を得、持続的に発展することができる組織運営を行っている。

平成30年10月に結果が発表された指定管理者選定において、「長期的な視点で指定管理者の果たすべき役割をしっかりと認識した具体的な提案内容」と高評価を得、平成31年4月から令和9年3月末までの8年間に及ぶ指定管理者に選定された。

公文協や公技連、劇音協への参画、各事業を通じた取組により、他地域の劇場・音楽堂や教育機関等関連団体との関係が強化されている。地元アーティストや近隣文化施設と共に地域活性に資する事業を行うと同時に、海外招聘公演を積極的に行い、そのネットワークはローカルにも、グローバルにも広がっている。